香川県におけるアゾキシストロビン耐性イチゴ炭疽病菌（Glomerella　cingulata）の発生と薬剤防除効果について

米澤晃子

香川県農業試験場研究報告　第 61 号(2010 年 3 月）21-27

香川県におけるアゾキシストロビン耐性イチゴ炭疽病菌（Glomerella　cingulata)の発生状況を調査するとともに、各薬剤の効果を調査した。

1. アゾキシストロビン耐性菌の菌株率は、2003 年が 0%（0／3 菌株)、2005 年が 66.7%（4／6 菌株)、2006 年が 97.1%（66／68 菌株）であり、2006 年には県下全域で発生が認められた。
2. ベノミル耐性菌の菌株率は、2003 年が 100%（3／3 菌株)、2005 年が 83.3%（5／6 菌株)、2006 年が 100%（68／68 菌株）であり、ジエトフェンカルブはベノミルと負の交差耐性を示した。
3. アゾキシストロビン耐性菌に対する殺菌剤の予防効果は、フルジオキソニル水和剤、プロピネブ水和剤、ジチアノン水和剤、イミノクタジンアルベシル酸塩水和剤およびマンゼブ水和剤が高かった。
4. アゾキシストロビン耐性菌に対する殺菌剤の治療効果は、ジエトフェンカルブ・チオファネートメチル水和剤は展着剤の加用により防除効果がやや向上した。

キーワード：イチゴ炭疽病，アゾキシストロビン，耐性菌，薬剤，展着剤